

近世後期の地方書肆と村落民衆

——倉敷書肆太田屋六蔵を事例として——

はじめに

読書のあり方に注目して近世社会を見通そうとする研究が、近年急速に盛り上がりを見せている。このような新潮流登場の背景に、横田冬彦氏の大胆な問題提起があることはいうまでもない⁽¹⁾。そもそもかつての日本近世史研究は、庶民読者層の勃興をせいぜい幕藩制解体期の現象と限定的に捉えてきたため、書物知の社会的影響力という視座から近世社会の全体像を窺う問題設定は立てにくかった。しかし横田氏によると、知的読書を行う村落民衆は近世前期から広範に存在しており、江戸幕府もそれを土台として国家支配を行っていたという。

以上のような近世民衆の捉え直しに基づき、今や読書行為を媒介とした「政治常識」の共有⁽²⁾や、「歴史意識」の形成⁽³⁾までが議論の俎上に乗ることとなった。近世人が地域を越え身分階層を越えて、ある知識・観念を共有していたというイメージは、これまであまり提起されることのなかったものである。読書の現場に密着し、読者の意識にまで考察の手を伸ばす新たな書物史研究は、従来の近世史像に書き換えを迫るほど、大きな潮流になったといえる。

ところで、近世書物史研究が現在のように急激な注目を集め出す前から、出版機構や書物流通そのものの特質を探る研究は着々と進められていた。このように指摘すると、真つ先に思い至るのは、今田洋三『江戸の本屋さ

引野 亨輔

ん⁽⁴⁾』であろう。もちろん同書が出版機構研究の金字塔であることは間違いないが、それ以上に筆者が目じりたいのは長友千代治『近世貸本屋の研究⁽⁵⁾』である。というのも、書物知の広範な浸透が近世人にある種の意識共有をもたらしたとする新たな書物史研究にとつて、長友氏の研究成果は一つの重要な根拠となつていよう思われるからである。

「書物・出版の江戸時代」という表現は、昨今当たり前のよう使用されているが、近世前中期における本屋の軒数はやはり三都を中心に限定されたものであり、販売される書物も今とは比べものにならない高級品であった。こうした事実を踏まえるなら、新しい書物史研究の動向に対して、書物知の広範な普及を根底から疑問視する立場は根強く残ると思われる。そして、予想し得る右のような批判に、一つの説得的な解答を用意してくれるのが、長友氏の研究蓄積なのである。すなわち、店舗を常設する本屋は確かに江戸時代を通じて限られた数だったものの、行商スタイルの貸本屋はその不備を補つてあまりある活躍をみせていた。彼らは三都で出版された書物を一定量買い取り、地方村落の隅々にまで貸して歩い

たため、近世民衆は購入するより安価な見料で書物知に触れることができた。

こうした論法を用いることで、我々はひとまず「書物・出版の江戸時代」という表現に確証を持てる訳であり、書物史の新たな動向に対する長友氏の恩恵は多大なものといえる。ただし、長い研究蓄積を有する出版機構・書物流通に関する研究が、右のごとく近年盛り上がりをみせる読書論・読者論の「前置き」としてのみ利用されるのであれば、それは決して好ましい状況とはいえない。

ロジェ・シャルチエの議論を借りるまでもなく⁽⁶⁾、書物の意味を構築するのは、作家である以上に、それを製造する職人であり、流通させる本屋・貸本屋である。同じ内容の本を読むにしても、その形状や入手条件によつて生み出される意味が異なるのならば、書物の流通構造を解き明かす研究と読書のあり方を問う研究は、より積極的な対話を行つていく必要があるだろう⁽⁷⁾。

もつとも、筆者の指摘を待つまでもなく、既に幾つかの先行研究において、書物流通論と読書論の対話は試みられている。例えば、鈴木俊幸『江戸の読書熱』では⁽⁸⁾、先ず寛政期における新しい読者層の登場が把握された上

で、それに伴い本屋も販売戦略を変え、書物そのものもかたちを変えていく様相が見事に描き出される。また、小林准士「近世における知の配分構造」でも、元禄・享保期における書物入手の具体相が丹念に分析された上で、それを踏まえた知識世界のあり方が解き明かされる。

両氏の方法論に学びつつ、筆者自身の課題設定を行っておくと、おおよそ以下の通りである。①本稿では地方書肆太田屋六蔵を主な考察対象とするが、単なる出版機構研究に留まらず、読書の現場にまで踏み込み、近世人が書物を手にする方法や、その背後にある流通構造を解き明かしてみたい。②江戸時代における読書空間の諸条件を一地域に即して丁寧に掌握した上で、その条件に規定されて展開する書物知の特質に迫ってみたい。本稿中で右の二つの課題にどこまで答え得るかは分からないが、ひとまずこのような道筋を示した上で、書物史研究の新たな局面を目指し歩を進めたい。

一、福山藩領山手村開地三谷家と

倉敷書肆太田屋六蔵

さて、前述のような課題設定に基づき、近世人の読書の現場に踏み込もうとするためには、おのずから特定地域に焦点を絞った考察が必要となってくる。そこで本稿では、近世後期の備後福山藩領山手村を舞台に定め、同村の開地三谷家と備中倉敷書肆太田屋六蔵の間で展開された書物取り引きを素材に、以下の考察を進める。

福山藩領沼隈郡に属する山手村は、天保期（一八三〇～四四）の村高が約一六〇〇石、文化期（一八〇四～一八）の人口が約一三〇〇人という平均的な近世村落である。近世山陽道（西国街道）のルート上にあり、東進五kmほどで神辺宿、西進十kmほどで今津宿にたどり着く。また、南下してすぐの位置に福山城下町も存在し、交通の利便性が同村の大きな特徴となっている。¹⁰⁾

ちなみに、近世前期の山手村には草分け百姓三〇数軒で構成される宮座が存在したが、こうした初期宮座構成員は宝暦・天明期（一七五一～七二）の経済変動で次々に

没落したと指摘されている。対照的に、同じ頃新たな宮座構成員となり、同村の最有力農民にのし上がったのが開地三谷家である。由緒によると三谷本家が山手村に移住したのは寛永期（一六二四～四四）であり、無論この時点で宮座の一員として鎮守祭祀に関わる資格はなかった。しかし、本家から分かれて「開地」の屋号を名乗った開地三谷家は、土地集積・小作地経営を進めて村内での発言権を高め、ついに草分け百姓と同等の宮座構成員資格を手にする事となる。幕末期における開地三谷家の持高は一〇〇石を越えており、この頃には山手村の庄屋を同家が世襲で務めることとなった。⁽¹¹⁾ちなみに、開地三谷家の繁栄は近代に至っても衰えることがなかった。同家出身の三谷一二は、明治・大正期（一八六八～一九二六）に三菱コンチエルの発展を支え、晩年故郷に戻って福山市長の任に就いている。

開地三谷家に残された膨大な古文書群⁽¹²⁾は、江戸時代における福山藩領の村落状況を探る上で大変貴重なものだが、その中でも三谷庄右衛門と倉敷書肆太田屋六蔵との間で取り交わされた一六〇点余りの往復書簡は、上層農民の文化活動を探る上で格好の史料である。もともと、

これらの往復書簡には備忘用・控え用のメモや断簡も多く含まれ、逆に作成年代がはっきりと記されたものは皆無に近い。そこで、歴代当主が書き綴った「三谷家日記」中に散見される書物購入記事と照合し、書簡の年代特定に努める必要が出てくる。本稿作成にあたって筆者が進めた照合作業によると、年代特定に至った書簡は八〇点余りであり、そこから読み取り得る種々の書物取り引きは天保十四年（一八四三）から安政五年（一八五八）にわたって行われたものであった。⁽¹³⁾

ちなみに、地方書肆と在村知識人の書物取り引きが窺い知られる史料といえば、長友千代治氏によって紹介された下郷千蔵宛風月孫助書簡が有名である。⁽¹⁴⁾書物の指定注文や修理など得意先への細やかな気遣いが記された風月孫助書簡は、今筆者が紹介する「三谷家・太田屋往復書簡」と類似する点が多い。ただし、ここで敢えて相違点に着目し、本稿の独自性を明確にしておくこと以下の通りである。①風月孫助書簡は明和八年（一七七二）という単年の書物取り引きを記したもののだが、「三谷家・太田屋往復書簡」は十年以上のタイムスパンを有しており、多少とも年次による変遷を追うことが可能である。②風

月孫助は京都の老舗風月荘左衛門から暖簾分けされた名古屋屋出店であるが、太田屋六蔵は紛れもなく倉敷で生まれた生え抜きの書肆である。そこで、本店からの商品提供が所与の条件であった風月孫助のケースとはやや異なり、三都書肆とのコネクション形成や他方での自立性をより鮮明に浮かび上がらせることができる。以上の点を考慮に入れた上で、本稿ではもっぱら「三谷家・太田屋往復書簡」を活用し、近世地方書肆の経営戦略や村落民衆の読書経験を考察することとした。

なお、三谷家に書物を提供した太田屋六蔵という存在について、ここまでほとんど触れるところがなかった中で、先行研究から窺い得るその性格を簡単に把握しておく。『福山市史中巻』によると、太田屋は藩領外の倉敷に本拠を置きつつ、福山でも定期的に出張販売を展開し、同藩領域の書物普及に貢献した地方書肆である。¹⁵⁾ ちなみに、福山城下町を本拠とする地方書肆が江戸時代のいつ頃誕生したかは現時点で明らかにし得ていないが、太田屋レベルの書肆となると、恐らく幕末に至るまで一軒も存在しなかったのではないだろうか。というのも、大和博幸「地方書肆の基礎的考察」では、倉敷書肆が複数紹

介され、その中でも太田屋六蔵の出版活動は寛政期（一七八九〜一八〇一）に始まり幕末までコンスタントに続けられるのに対して、福山書肆は笹屋喜兵衛一軒が挙げられるのみであり、その活動時期も詳細不明とされているからである。¹⁶⁾ そうすると、書肆不在の地方城下町に抜け目なく入り込み、庶民読者層の要望に応えたのが太田屋といつて良いだろう。

また、前述の鈴木俊幸『江戸の読書熱』でも、別な角度から太田屋という書肆の性格が指摘されている。¹⁷⁾ 鈴木氏によれば、天保期頃から三都書肆出版の往來物類には、主要板元だけでなく全国各地の売弘書肆（＝製造元から指定を受けた代理販売店）をずらりと列挙した刊記がみられ出すようである。太田屋六蔵もそうした地方売弘書肆の典型であり、大坂の有力書肆秋田屋太右衛門や敦賀屋九兵衛が出版した往來物の刊記に幾つかその名を確認できるという。つまり、三都書肆が地方読者層の取り込みを不可欠の課題として認識し始めた時代に、そうした三都書肆と積極的に提携し、備中・備後地域での商品流通に一役買ったのが太田屋であるといえる。

以上のように、幾つかの先行研究でその存在が指摘さ

れてきた太田屋六蔵であるが、地方書肆としての具体的な活動については、まだまだ不明な点が多い。そこで本稿では、山手村開地三谷家との書物取り引きを追うことで太田屋の経営実態を明らかにし、更には太田屋に支えられた在村知識人三谷庄右衛門の読書へも考察の手を伸ばしていきたい。

二、太田屋六蔵の経営実態

さて、山手村で展開された書物取り引きの具体相に迫るべく、三谷家・太田屋双方のやり取りが見えやすい弘化元年（一八四四）四～五月に絞って史料解説を進める。同年の「三谷家日記」によると、太田屋六蔵が福山を訪れ、三谷家に立ち寄ったのは、四月二一日のことであった。その様子は以下の通りである。

四月廿一日

倉舗書林太田屋来ル、藩翰一、百人一首式冊、養生草、鳩翁道話十八さつ、源平盛衰記式さつ、柳たる二似たる小本四冊、唐筆十本預ル

簡略な記事であるが、注目すべき点も幾つか見出せる。

最初に触れておきたいのは、太田屋が三谷家を直接訪ね、書物数冊を（※後述するように購入検討の見本として）預けた点である。江戸時代の貸本屋が常設店舗を構えず、得意先への定期訪問を基本スタイルとしていたことは既に述べたが、地方書肆太田屋の場合も事情は同じであった。福山城下への出張販売といっても、現在のような青空古本市が開かれたのではなく、書物を抱えた太田屋が行商圏の得意先を巡り歩くことでその営業を成り立たせていた訳である。

なお、太田屋は三谷家のような得意先への訪問に際して、沢山のお薦め商品を紹介したと思われるが、購入・不購入の判断を待つまで一、二冊の見本を貸し出している点も注目して良いだろう。例えば、四月二一日の訪問時に「藩翰一」が預けられているが、これは後に一五冊揃いで購入されることとなる『藩翰譜』の見本である。また、詳しい論証は省くが、「百人一首式冊」とあるのは、『百人一首峯のかけはし』全二冊と『百人一首一夕話』全九冊の見本各一冊を指している。ちなみに、『鳩翁道話』は正編・続編・続々編の三編各六冊からなる石門心学書であり、最初から全十八冊揃いで届けられているが、こ

れは恐らく事前に注文を受けた商品であり、見本を預けるまでもなく購入が確実視されていたのだろう。

以上のように、太田屋の営業スタイルは、得意先に直接訪問して見本を提示し、その後正式な発注にこぎつけるというものであった。そこで、通常ならば四月二日以降に三谷家から何らかのレスポンスがあり、太田屋の再訪問が始まる筈だったのだが、不慮の事態によつてこの時の書物取り引きは中断を余儀なくされた。弘化元年のものと考えられる「三谷家・太田屋往復書簡」の一つには、以下のような事情が記されている。¹⁹⁾

口上

此間ハ推参得寛慮大慶奉存候、然者其翌日御使被下候筈故、本取拵置可申処、罷歸候処江飛脚参り、直ぐ二夜通し帰国仕、又々此間々福山へ相越申候、夫故差上候品延引二相成申候段御免可被下候、但し帰国之義別而心配之義二ハ無之候間、御あんし被下間敷候

覚

一、三匁八分 ちん功記小本巻

一、三匁八分 同大全

十八匁五分 大全早引節用

外二、峯のかけはし残一

一夕話残り八

藩翰譜残十四

別二、壹匁八分 七曜方位・吉凶方

べ

右之通此度差上申候間御入掌可被下候、以上

四月廿九日

太田屋六蔵

開地様

この書簡は太田屋から「開地様」||三、谷庄右衛門に対して出されたものだから、「推参得寛慮大慶奉存候」が四月二一日の三谷家訪問を指していることは間違いない。同日太田屋は幾つかの見本を預けていったため、数日中に三谷家から正式な発注があり、例えば藩翰譜などの残りを改めて配達する手筈だったかと思われる。しかし、その日得意先を巡って福山城下に戻ると、飛脚から緊急の連絡が届いており、太田屋は慌てて倉敷に一時帰国した。通常ならこのまま十日ほど続く筈の福山出張販売は、以上のような事情で中断してしまつた訳である。もつとも、倉敷での所用をつつがなく済ませた太田屋は、早々

に福山へと取って返した。そして、「差上候品延引二相成申候」ことを三谷家に詫び、書物取り引きを再開したが、四月二十九日ということになる。

こうした史料解釈を裏付けるように、同日には「峯のかけはし残一」「一夕話残り八」「藩翰譜残十四」などの書物（＝四月二一日に預けた見本の残り）が、太田屋から三谷家に届けられている。また、再訪問までに三谷家から追加の事前注文もあったのだろう。小本の『塵劫記』や『塵劫記大全』、『大全早引節用』も新たな見本として届けられた。なお、これらには購入する場合の金額も付記されている。前述した太田屋の営業スタイルをより正確に把握し直すと、見本とともに値段を提示し、その上で得意先からの正式発注を待つものだったといえる。

さて、ここまで少々念入りに太田屋の行動様式を追ってきた訳だが、弘化元年四月の書物取り引きで三谷庄右衛門は実際どのような書物を購入するに至ったのだろうか。いきなり結論へと急ぐようだが、それは以下の史料で判明する。⁽²⁰⁾

覚

一、八拾目

藩翰譜十五

- 一、廿三匁五分 鳩翁道話十八
- 一、拾八匁五分 薄用早引一
- 一、五匁六分 小本四冊
- 一、三匁八分 塵劫記小本壹
- 一、八匁 阿弥陀経三
- 一、四匁 草書本
- 一、 碁経置碁分

〆百四拾三匁四分

内九匁いろは字引一

残百三拾四匁四分

右之通書物代銀差引残銀為持上候間御引合御受取可被下候

一、詩藻行潦四冊

一、百人一首一夕話九冊

右御返却申上候

この史料も、「三谷家・太田屋往復書簡」の一つである。差出・宛所・日付のいずれも欠いているが、内容をみれば太田屋六蔵に宛てた三谷庄右衛門の書簡控えであることは間違いない。最終的な購入に向けて、両者の交渉はしばらく続いたから、作成年代を推測するなら弘化元年

五月上旬といったところだろう。

同書簡から三谷家が購入した書物を確認してみると、『藩翰譜』十五冊、『鳩翁道話』十八冊、『塵劫記』一冊などであり、その総額は一四三匁四分に上る(※『百人一首一夕話』については、全冊取り寄せながら結局太田屋に返却している)。ちなみに、「九匁いろは字引一」とあるのは、かつて太田屋から購入した古本を再売却した値段であり、これを差し引いた一三四匁四分が今回支払われた書物代ということになる。⁽²¹⁾

表一(次頁)は、「三谷家・太田屋往復書簡」から読み取れる書物取り引きを一覧化したものだが、⁽²²⁾その中でも一三四匁四分は一度に支払われた最高額の書物代である。ただ、それに次ぐ一〇四匁や六〇匁余の支払いも確認でき、そのため、弘化元年四く五月の書物取り引きをことさらに特異な例と捉える必要はないだろう。太田屋の福山出張販売は、毎年四く六月の間に一回、九く十一月の間にも一回といった具合に、年二回平均のペースで実施されていた。定期的とはいえ必ずしも頻繁でない太田屋の来訪に対し、三谷家を始めとする得意先は、その機を逃さず大量の書物を一括購入していたのである。

(i) 書物流通の末端に位置して

さてここまで、検討対象を特定期間の書物取り引きに絞ることで、地方書肆太田屋の基本的な営業スタイルに迫ってみた訳だが、引き続き購入までの経緯をより詳細に分析してみたい。というのも、三谷庄右衛門は一〇〇匁以上の書物を一括購入する得意先であるとともに、なかなか「うるさ型」の買い手であり、購入に先立って太田屋に様々な注文を付けているからである。例えば、以下に提示した史料では、書物に対する彼のこだわりが生々しく披露されている。⁽²³⁾

口上

此間藤井幾右衛門御使者二参候節御越之書もつ御書付通慥二入手仕候

一、ちん功記小本

但此分御もらひ申度、併是八他々被相頼候二付差遣候処、表紙之角二少々損し有之、外二此手之本御座候ハ、無疵之分二御代替御こし可被下候

表1 本田屋六耀と三谷庄右衛門の主な書物取引先

取引先年月	本田屋から三谷家へ届けられた書物	三谷家から本田屋へ支払われた書物代	三谷家から本田屋へ再売却された古本
天保14年(1843)4月	○草子集12冊・○笑草集6冊・○方鑑図解5冊・○家相便覧3冊・○家相図解2冊・○方鑑図解5冊・○家相大全3冊・○方鑑精義2冊・○方鑑秘訣1冊・○運方明鑑1冊・○風水園草章2冊・○雑師書色々14冊など	47匁(草子語彙30匁・実筈7匁5分・書面集巻5匁・方鑑便覧12匁・家相図解3匁5分の合計158匁から講義の売却代1匁を差し引いたもの)	轉衣1冊 (元値14匁を1匁で再売却)
同年10月～11月	○行書類纂12冊・○和漢年契1冊 ○藩翰譜15冊・○鴻翁道話18冊・○大全早引節用1冊・○柳たる二枚たる小本4冊・○慶劫記小本1冊・○阿弥陀經3冊・○草書本10冊・○應劫記大全1冊・○百人一首一夕話9冊・養生一言草1冊・○峯のかげし2冊・○文室節用1冊・○七曜方位1冊・○吉凶方1冊など ○雑字類編2冊・○詩漢行藻4冊・○置春自在10冊・○通平盛衰書記25冊	不明	
弘化元年(1844)4月	○道二道話12冊・○本朝千字文1冊・○三河後風土記46冊・○早引人物故事2冊・○節用集1冊・○道二道話続編2冊・○五輪秘記1冊・○幼学秘訣1冊・○玉石雜語1冊・○農業全書11冊・○農家業事5冊・○病家雜記8冊など	134匁4分(藩翰譜80匁・鴻翁道話23匁5分・大全早引節用18匁3分・柳たる二枚たる小本3匁6分・慶劫記小本3匁8分・阿弥陀經8匁・草書本4匁の合計143匁4分からいろいろは節用の売却代9匁を差し引いたもの)	いろいろ節用1冊 (9匁で再売却、なお元値不明)
同年5月～6月	○雑字類編2冊・○詩漢行藻4冊・○置春自在10冊・○通平盛衰書記25冊 ○道二道話12冊・○本朝千字文1冊・○三河後風土記46冊・○早引人物故事2冊・○節用集1冊・○道二道話続編2冊・○五輪秘記1冊・○幼学秘訣1冊・○玉石雜語1冊・○農業全書11冊・○農家業事5冊・○病家雜記8冊など	15匁6分(松翁道話1匁・波菴集18匁5分・歳時記8匁5分分の合計33匁から類題発句集の売却代22匁4分を差し引いたもの)	藩翰譜15冊(元値80匁を64匁で再売却) 本平衆記1冊(12匁で再売却、なお元値不明) 甚経玉たすき4冊(8匁で再売却、なお元値不明) 古本品々々(6匁で再売却、なお元値不明)
同年9月～10月	○私翁道話9冊・○波菴集4冊・○歳時記4冊・○唐土名勝記6冊・○藤菜毛1冊・○農興便利譜3冊・○日記牧事大全3冊など ○文海探珠2冊・○書面集巻1冊・○釈迦八相記4冊・○和漢三才図会6冊・○群書一覽6冊・○三聚戒本1冊・○責而者草2冊など	16匁3分(文海探珠3匁・書面集巻3匁3分・釈迦八相記10匁)	類題発句集3冊(元値28匁を22匁4分で再売却)
弘化2年(1845)10月～翌年閏5月	○和漢三才図会75冊	三河後風土記46冊(元値120匁を96匁で再売却)	
弘化3年(1846)9月～11月	●梧窓漫筆1冊・●常山紀談1冊		
弘化4年(1847)1月	○常山紀談25冊・○雨夜灯1冊・○印章大成1冊・○冊本内百番箱入・○泰定石集1冊・○置春自在10冊・●歌書3冊など	和漢三才図会81冊(元値200匁を160匁で再売却)	
同年6月	○四書丹表紙		
嘉永2年(1849)閏4月～10月	○十ノ八史略7冊・○琴曲大意抄1冊・○碎金幼学1冊・○詞話解字解1冊・○早引節用古本1冊・○国語定本6冊・○文章規範7冊・○古文初集2冊・○古文後集2冊・○王代一覽7冊など ○常山紀談拾遺4冊・○王代一覽1冊・○清雨考2冊・○北斎画手本・○練王代一覽10冊・○唐工王代一覽4冊など ○三國志51冊・○方別指要1冊・○煎茶要覽1冊・○煎茶要覽1冊・○非語雜草3冊・○百人一首一夕話9冊・●日本外史2冊・●雲上明鑑2冊・●海外新話1冊など	19匁5分(常山紀談85匁・雨夜灯3匁5分・印章大成8匁・冊本内百番箱65匁・泰定石集10匁・その他6匁の合計177匁5分)から和漢三才図会の売却代160匁を差し引いたもの ※なお2匁余分に支払う 28匁(四書丹表紙30匁から過日余分に支払った2匁を差し引いたもの)	
同年11月～12月	○和漢三才図会75冊		
嘉永3年(1850)6月～11月	○十ノ八史略7冊・○琴曲大意抄1冊・○碎金幼学1冊・○詞話解字解1冊・○早引節用古本1冊・○国語定本6冊・○文章規範7冊・○古文初集2冊・○古文後集2冊・○王代一覽7冊など ○常山紀談拾遺4冊・○王代一覽1冊・○清雨考2冊・○北斎画手本・○練王代一覽10冊・○唐工王代一覽4冊など ○三國志51冊・○方別指要1冊・○煎茶要覽1冊・○煎茶要覽1冊・○非語雜草3冊・○百人一首一夕話9冊・●日本外史2冊・●雲上明鑑2冊・●海外新話1冊など	44匁5分(十ノ八史略26匁・琴曲大意抄5匁・碎金幼学6匁・詞話解字解4匁・早引節用古本8匁5分・その他13匁の合計60匁5分)から道二道話・節用小簿用の売却代16匁を差し引いたもの 39匁5分(王代一覽18匁5分・晴雨考1匁・北斎画手本40匁の合計59匁5分)から雑字類編・印章大成・漢国指要の売却代20匁を差し引いたもの 60匁7分1厘(三國志・方別指要・煎茶要覽・煎茶要覽・非語雜草・百人一首一夕話など合計151匁5分)から常山紀談などの売却代90匁8分を差し引いたもの)	雑字類編2冊(元値11匁5分を9匁で再売却) 印章大成1冊(元値6匁を6匁で再売却) 漢国指要1冊(5匁で再売却、なお元値不明)
嘉永4年(1851)6月～翌年閏2月	○常山紀談拾遺4冊・○王代一覽1冊・○清雨考2冊・○北斎画手本・○練王代一覽10冊・○唐工王代一覽4冊など ○三國志51冊・○方別指要1冊・○煎茶要覽1冊・○煎茶要覽1冊・○非語雜草3冊・○百人一首一夕話9冊・●日本外史2冊・●雲上明鑑2冊・●海外新話1冊など		
嘉永6年(1852)6月～8月	○三國志51冊・○方別指要1冊・○煎茶要覽1冊・○煎茶要覽1冊・○非語雜草3冊・○百人一首一夕話9冊・●日本外史2冊・●雲上明鑑2冊・●海外新話1冊など		

※本田屋から三谷家へ届けられた書物のうち、○は購入した書物、●は後に返却した書物を示している。

一、薄用之字引

但乾坤時候と門部分ケ有之候分ハ無御座候哉御尋申

上候

一、続鳩翁道話一上下

但此分上之末と下之初メニ入違有之候ニ付為持上候、

類本御座候ハ、御代替可被下候

ノ

(中略)

五月二日朝

山手開地

太田屋六蔵様

右の史料も「三谷家・太田屋往復書簡」の一つであるが、内容から推測するに、先に示した弘化元年(一八四四)四月二十九日付の太田屋六蔵書簡を受け、三谷庄右衛門が出した返信と考えられる。冒頭で、太田屋が用意した商品「藤井幾右衛門」から受け取ったという興味深い事実に触れるが、この人物については後に改めて詳述する。むしろ今注目したいのは、「ちん功記小本」「薄用之字引」「続鳩翁道話一上下」という三種類の書物についてである。前掲史料でも確認した通り、これらの書物はいずれも最終的に購入された。ただし、その決断へと至る前に、

三谷庄右衛門は太田屋の商品一つ一つに様々な不平不満をぶちまけるのである。

先ず『塵劫記』からみていくと、「此分御もらひ申度」と早々に購入の予定を明言している。ただ、同書は三谷本人が注文した商品ではなく、「他々被相頼候」ものであった。近隣の読書人から依頼され、立て替えて購入する書物だからこそ、その状態には万全を期したかったのだろう。三谷は表紙の角にあった小さな破損にクレームを付け、「無疵之分」との交換を要請している。これを受けた太田屋の対応は迅速なものであった。同日のうちに二冊の『塵劫記』を送り届け、いずれか納得のいく商品を受け取るよう通達している。²⁴⁾ なお、こうした行動から推測するに、太田屋は出張販売に臨んで人気商品をあらかじめ複数冊準備しておき、得意先からの思いがけない注文にも的確に対処したようである。

さて、『塵劫記』の場合、知り合いから依頼されての代理購入だったため、特に良品へのこだわりをみせたようだが、実は三谷庄右衛門自身も書物の状態には頻繁にクレームを付けている。例えば、嘉永三年(一八五〇)十一月一日のものと考えられる「三谷家・太田屋往復書簡」

の一つには、以下のような彼の言い分が記されている。⁽²⁵⁾

王代一覽板うつり不宜、文字相分り兼候処品々有之候間、此分ハ御返し可申候、急々宜敷品有之候ハ、必其節御もらひ可被申候

この日、太田屋から三谷家に『日本王代一覽』七冊を含む幾つかの商品が届けられた。しかし、同書の「板うつり」は大変悪く、文字の読めない箇所もあったため、三谷庄右衛門は提示された十七匁という値段で購入する気になれなかつたらしい。そこで彼は、良品を返却してもらえれば必ず購入すると断つた上で、この商品を返却したのである。もともと太田屋六蔵にしてみると、今回の三谷の主張は少々受け容れ兼ねるものであった。同年十一月十四日のものと考えられる「三谷家・太田屋往復書簡」の一つで、彼は以下のような返答をしている。⁽²⁶⁾

王代一覽段々御面倒難有、先便申上候通り寛文時代之板故うつり悪敷義、外二当時ハ無之、其内古本杯にて御出可申義も難計、何分直段引合不申二付、無抛御断申上候、色々御面倒難有奉存候

太田屋によれば、そもそも『日本王代一覽』は寛文年間(一六六一〜七三)に彫られた板木を何度も使用して刷

りを重ねている書物だから、後印本になると刷り上がりが悪いのは当然であった。もつとも、まだ板木が傷んでいない頃に刷られた古本なら「板うつり」も良好なのだろうが、入手の用途は今のところ全く立っていない。しかも、状態の良い古本は貴重であり、十七匁で売りさばいたのでは採算が取れない。こうした理由を述べた上で、太田屋は残念ながら三谷の要望に応えられないと結論した訳である。ただし、その後の経過を追うと、『日本王代一覽』良品を求める市場調査はどうやら地道に継続されていた。「三谷家・太田屋往復書簡」のうち、嘉永四年(一八五二)十月五日のものと考えられる太田屋六蔵書簡によると、⁽²⁷⁾彼はついに「古本二而紙板よろしき」商品を手に入れて三谷家に届け、十八匁五分という値段で購入を勧めているからである。当然三谷庄右衛門はこれを買取つた。実に一年近い努力の末、太田屋は得意先の要望を満足させたことになる。

次に「薄用之字引」であるが、これは四月二九日に届けられた『大全早引節用』を指しているのだらう。やがて購入というかたちに落ち着く同書についても、三谷庄右衛門は面倒な注文を突き付けている。節用集はどうし

ても必要な書物なのだが、「乾坤時候と門部分ケ有之候分ハ無御座候哉」というのである。「門部」とは節用集の項目立てに当たるので、勧められたものは項目の分け方が気に入らなかつたことになる。随分と要求の多い得意先に対して、太田屋はここでも素早い反応をみせた。福山出張販売に臨んで用意してきた節用集のうち、三谷の求める条件に見合つた商品は『文宝節用』だけだつたらしい。そこで、同日中にこの節用集を三谷家に届け、『大全早引節用』の代わりに購入するよう勧めたのである。しかし、新たに届けられたこの商品も三谷庄右衛門のこだわりを満足させるものではなかつた。彼は早々に『文宝節用』を返却し、結局最初に届けられた『大全早引節用』を購入している。

ちなみに、節用集をめぐる一連のやり取りをみていると、今やもっぱら図書館が担うようになったレファレンスサービスを、江戸時代には太田屋のような地方書肆が果たしていた事実が気付かされる。ただし、レファレンスといつても三谷庄右衛門から太田屋に与えられる情報は随分漠然としたものであり、どうやってお目当ての書物を探し当てるのか、我々にはいささか不安な位である。

幾つか他の事例を挙げてみよう。

「三谷家・太田屋往復書簡」の一つによると、太田屋は三谷家に『呉竹集』という和歌集を届けている⁽²⁸⁾。書物取り引きの年代は不詳。もつとも、三谷庄右衛門はこの商品の「板うつり」の悪さにクレームを付け、良品との交換を求めて一旦返却した。『日本王代一覽』購入時と同じ事態が生じた訳だが、不思議なことに『呉竹集』の代銀三三匁は、良品の再配達を待つことなくさつさと支払われた。というのも、三谷には以下のような目算があつたからである。

尚々呉竹集板移り宜敷分無御座候ハ、是二似寄候歌書薄用二而帙入之分御取寄御こし可被下候、以上たとえ良品が確保できなくても、「是二似寄候歌書」を見繕い届けてくれれば構わない。だから書物代は前もつて支払つておくという訳である。太田屋の見識に全幅の信頼をおく三谷庄右衛門の姿勢が窺い知れよう。

残念ながら現存の「三谷家文書」で、この書物取り引きの顛末を最後まで追うことはできない。しかし、江戸時代の地方書肆がレファレンスサービスを担つていく、その雰囲気来接することはできた。彼らは現代の図書館

のように検索システムを充実させていた訳ではない。しかし、行商スタイルで日々得意先から注文を取り付け、誰よりも地方読者層の好みを熟知していた。そうして築き上げられた親密性に基つき、太田屋は顧客の必要とする書物を選び出していたのであろう。

『呉竹集』をめぐる書物取り引きは、買手の三谷が太田屋に商品選別を一任した事例であるが、それとは逆に、売手の太田屋が独断で依頼されていない商品を送り届けることもあった。やはり年代は不詳だが、「三谷家・太田屋往復書簡」の中には以下のようなものがある。²⁹⁾

過刻者罷出有難奉存候、しかれハ

一、拾七夕 鯉玉集四・五篇

右之通差上申候間御入手可被下候、鴨川集此節売きり居申候二付右之本差上申候、此集も近代物二御座候間、随分鴨河集ト同様二奉存候、先者右早々頓首

十二月朔日

太田屋六蔵

嘉三郎

開地様

ここで太田屋は『鯉玉集』という和歌集を三谷家に届けている。しかし、三谷庄右衛門が事前注文していたの

は、『鴨川集』という別の和歌集であった。希望商品の品切れに直面した太田屋は、「随分鴨河集ト同様」の『鯉玉集』を送り届けることで、素早く顧客の注文に対処したのである。ちなみに、『鴨川集』・『鯉玉集』はそれぞれ長沢伴雄・加納諸平が編集した書物であるが、両者はいずれも本居大平の高弟という共通点を持っている。

最後に「続鳩翁道話一上下」を取り上げたい。『鳩翁道話』は前述の通り正編六冊・続編六冊・続々編六冊からなるが、三谷はこのうち続編の二冊について文意の通らない箇所を見付け、良品との交換を求めた。『塵劫記』のような人気商品の場合、あらかじめ複数冊準備して出張販売に向いていたことは既に述べた。しかし、『鳩翁道話』の場合、この時福山に持ち込まれたのは一部のみであったらしい。しかも太田屋は、文意が通らない理由を当初落丁に求めていたから、「鳩翁八只今当地二而入替申候義難出来、早々板元江申遣候」と返答した。『鳩翁道話』の件は、福山出張販売中に解決できる問題でないため、やむを得ず板元に送り返し、後日良品を届けるという訳である。ちなみに、太田屋は地方売弘書肆として上方の有力書肆たちとコネクションを持っていたので、『鳩翁道

話』の板元と連絡を取ることも容易だったと推測される。地方読書層にとって、太田屋から買う書物とは、もし不備が見付かったとしてもアフターケアが保証されている商品であった。

もっとも『鳩翁道話』の場合、実際に不良品が板元へ返送されることはなかった。弘化元年五月三日のものと考えられる「三谷家・太田屋往復書簡」の一つで、太田屋六蔵は以下のように事情を説明している。⁽³⁰⁾

鳩翁道話当地二而入替如何と奉存候処、落丁無之、入違のミニて、早々相直し差上申候

どうやら太田屋は、三谷から送り返された鳩翁道話を良く確認せず、落丁本だと思ひ込んでいたらしい。しかし、実際に落丁箇所はなく、錯簡(※紙の前後入れ違い)がみられるだけだった。それならわざわざ板元に頼むまでもないと、彼は自ら錯簡箇所を修繕し、福山出張中に三谷家へと送り返したのである。

以上、三谷庄右衛門との書物取り引きに注目することで、太田屋六蔵の経営実態を分析してみたが、そこから浮かび上がるのは、書物流通の末端に位置するがゆえに、庶民読者層のあらゆる要望を集約的に処理していく地方

書肆の姿であろう。彼は得意先のクレームを逐一聞き届け、不良品の返品・交換はもちろんのこと、レファレンスサービスや書物の修繕まで請け負った。このような書物の何でも屋としての側面こそ、太田屋発展の秘訣だったといえる。

(ii) 広い行商圈

さてここまで、地方読者層の様々な注文に応えて活躍する太田屋六蔵の姿をみてきたが、彼の過剰なまでのサービスは、当然三谷庄右衛門がそれに相応しい「お得意様」であるという事実由来している。三谷を貴重な得意先と呼び得るのは、何も高額な商品を一括購入するからだけではない。それとともに、三谷は周辺の読書人を束ね、彼らの注文を太田屋に斡旋してくれる得意先でもあった。『塵劫記』が「他々被相頼候二付」という理由で注文されたことは、先に紹介した通りであるが、同様の文言は「三谷家・太田屋往復書簡」の中で幾つも確認できる。太田屋にとって三谷家とは、そこを訪問することで山手村近辺の書物購読層からまとめて注文を受けたこ

とになる、得難い書物取り引きの拠点だったのである。

このようにみてくると、福山出張中の太田屋はかき切りで三谷庄右衛門の要望ばかりに応えていたかのようである。しかし、意外にも両者の交渉は書簡の往復で済まされることが多く、弘化元年（一八四四）四〜五月の書物取り引きでも、太田屋が確実に三谷家を訪問していると判明するのは四月二日だけである。得意先への訪問をおざなりにして、彼は一体何をしていたのだろうか。

結論を先取りすると、三谷家と同じ位大事な得意先を順々に訪問していたようである。何しろ福山出張販売中の太田屋は、城下町の枠をはるかに越え、広範な行商圏を巡り歩いていたのである。「三谷家・太田屋往復書簡」から幾つかの史料を例示してみたい。

華墨拝見仕候、如仰深冷之節二御座候処、愈御壮健
被為在御起居候由、所喜至極奉存候、然者先日夕御
当地江推参仕候間、又々不相替御注文被仰聞候様御
希上候（中略）私も今日松永の方へ罷越申候、短日之
事難計候得共大体明昼後貴家様へも御伺可申上候心
得二御座候、其節色々持参可仕候

右に引用したのは、弘化元年十月九日のものと考えら

れる太田屋六蔵書簡である。⁽³¹⁾ 同年四月にも順調な売り上げを記録した太田屋であったが、十月には再び福山へやって来たことが分かる。そこで、得意先の三谷家にも書簡を出し、「又々不相替御注文被仰聞候様御希上候」と挨拶した訳だが、肝心の太田屋はこの時福山城下町にいなかった。彼は出張販売に訪れるや、早々に松永村まで足を伸ばしており、城下に戻って三谷家に顔を出せるのは明日の昼頃だという。ちなみに、松永村は福山藩領沼隈郡に属し、城下から西進十五kmほどの位置にある。寛文年間（一六六一〜七三）に塩田が開発されたため、江戸時代を通じてその利益が村を潤していた。福山出張中にわざわざ泊まり込みで営業活動を展開しているのであるから、恐らくこの地の塩田地主や塩問屋は太田屋にとつて三谷家と同じレベルの得意先だったと考えられる。

出張中に太田屋が赴いたのは、松永村だけではない。「三谷家・太田屋往復書簡」の一つには、以下のような地名も登場する。⁽³²⁾

此間之御算用之義六蔵此節尾の道へ参り居申候間、
帰り次第御算用仕さし上可申候間、左様思召可被下

候

右の史料によると、太田屋は福山出張中に尾道町まで足を伸ばしている。そのため三谷庄右衛門は書物取り引きの勘定を済ませられずにいる訳である。尾道は言わずと知れた瀬戸内有数の港町であり、位置的には福山城下から松永村を通り越し西進二十kmほどである(※なお、同地は福山藩領ですらなく、既に広島藩領に入っている)。要するに倉敷書肆太田屋が行う福山出張販売とは、城下町周辺に限定されるものでなく、他藩領まで視野に入れる広範な行商活動だったことになる。太田屋が尾道をも行商圏に組み込んだ理由は問うまでもないだろう。彼にとってこの地の町人層が、福山城下以上に魅力的な顧客だったからである。

最後に、「三谷家・太田屋往復書簡」からもう一つだけ年代不詳の太田屋六蔵書簡を引用しておきたい。³³⁾

曆史残本十九冊之処、老冊六蔵輛へ持参り居申候、何せ明日者帰宅仕候間、帰り次第老冊者綿勘殿迄さし上申候間、左様御承知可被下候

「曆史」は『歴史綱鑑』全二十冊を指しているので、恐らく一冊だけ見本を預かっていた三谷庄右衛門が、購入を企図して「残本十九冊」の入手を望んだものと推測

される。ところが、同日輛の浦に出向いていた太田屋は、同書のうち一冊を行商用の見本品として持ち出していった。そこで、この一冊は福山城下に戻ってからあらためて送り届けると三谷へ通達したのである。輛の浦も尾道同様に古い伝統を持つ瀬戸内の港町である。こちらは福山城下から南進十kmほどの位置にある。繰り返し確認しておくと、太田屋が輛の浦に泊まり込んで営業を展開していた理由も、やはり港町の富裕層から書物購入を期待したためであろう。

以上、太田屋は福山出張販売中に、広い行商圏を休む暇もなく巡り歩いてきた訳だが、これは大変重要な事実である。時に一〇〇匁以上の買物をする三谷庄右衛門が、太田屋を福山城下に留めておく十分な理由になり得ていない事実は、松永・尾道・輛の浦といった繁華の地に三谷家レベルの得意先が幾つも存在したことを示唆するからである。

ところで、元禄・享保期の土佐藩領における書物流通を考察した小林准士氏は、以下のような興味深い結論を導き出している。³⁴⁾ 当該期、藩領に安定した書物供給を保障する地方書肆はまだ不在であったため、三都書肆と繋

がりをもち、地方への商品取り次ぎに努めたのは藩儒たちであった。例えば土佐藩儒の谷秦山は、藩領に強力なネットワークを展開し、門人・知人に京都書肆出版の書物を(※自身の好みも反映させつつ)斡旋していた。つまり、近世前中期段階の書物知は、良くも悪くも特権的知識階層と呼び得る人々の仲介で、地方への浸透を果たしていたといえる。

しかし、本稿で取り扱ったような幕末期になると、地方への書物流通体制はより成熟し、複層化している。寛政頃頃から地方都市にも徐々に本屋と呼び得るものが登場し始め、売弘書肆として三都の板元とコネクションを強化していくことは既に述べた。そして、書物知を供給する側に起こった構造転換の一方で、受容する側にも着実な成長があった。この時期の地方書肆にとつて、もはや得意先は藩儒・僧侶・医師といった知識人だけはない。三谷家のような有力農民であれば、周辺地域の読書人を束ねて、その注文を地方書肆に取り次ぐことができたし、恐らく港町や在郷町の富裕層でも同様の役割を果たした。太田屋は書物取り引きの拠点となるこうした得意先を行商圏のそこかしこに見出すことで、地方読者層を一

気に掌握できたのである。彼の営業スタイルは、書物流通の新たな段階を指し示すものといつても良いだろう。³⁵⁾

さて、以上のように太田屋は、続々と叢生する地方読者をターゲットに定め、広い行商圏を飛び回っていた。しかし、その一方で当時の書物取り引きは、追加注文やクレーム処理の繰り返しという側面を持っていた。出張販売中も頻繁に福山城下から離れていた太田屋を相手にして、三谷庄右衛門は満足のいく書物取り引きを完遂できたのだろうか。一所に留まらない太田屋に対し、その不都合を解消すべく活躍していたのが、実は先に触れた「藤井幾右衛門」のような存在である。

既述の通り藤井幾右衛門は、弘化元年(一八四四)四月の書物取り引きで太田屋六蔵の使者となり、見本品の残本や追加注文の品を三谷家に届けている。もともと彼は、金で雇われた雑用夫などではない。「三谷家日記」に繰り返し登場する藤井幾右衛門は、三谷家に対して大切な役割を果たしている。というのも、彼は定期的な訪問販売を行う薬売りなのである(※零細な振り売りの商人ではなく、福山城下に店舗も存在する)。書物取り引きの有無に関わりなく、日常的に三谷家へ出入りする藤井幾

右衛門は、太田屋にとつて格好の仲介役であつた。そこで彼は、時に太田屋の商品を預かつて三谷家へ配達し、時に双方の書簡や伝言を取り次ぎ、図らずも書物取り引きに関与していったのである。

頻繁に福山城下を離れる多忙な太田屋に代わり、三谷家への仲介役を果たしたのは、藤井幾右衛門だけではない。山手屋丈助という商人もやはり「三谷家日記」にたびたび登場するが、彼は種々の日常雑貨を三谷家に提供しており、小間物屋のような存在であつたと考えられる。日常的に三谷家を訪問する山手屋もまた、太田屋に見込まれ、良くその商品を配達した。なお、「三谷家日記」から弘化二年（一八四五）六月七日の様子を窺うと、「永代節用代式拾目、おもや分当家昨年取候分太田屋へ遣入、山手屋丈助へ頼遣申」というように、山手屋が三谷家から書物代を預かり太田屋へ届けている。⁽³⁶⁾ 当該期に太田屋の福山出張販売は確認できないため、恐らく山手屋は、商用などのついでに倉敷まで出向き、そこで書物代を届けたのだろう。こうした出来事から類推するに、出入りの商人を仲介役としている三谷庄右衛門のような得意先なら、太田屋が倉敷にいる間でも、書面での注文によつて

商品を取り寄せることは十分可能だつたと考えられる。

以上、地方読者層の成長に支えられ、広い行商圏を巡り歩く太田屋の営業スタイルを確認してきた。なるほど太田屋が赴く繁華の地には、周辺の書物購読層を束ねて注文を取り付ける魅力的な得意先が幾つも存在したのだろう。ただし、こうしたスタイルは個々の顧客と緊密な連絡を取り難いという不都合も生み出した。そこで太田屋は、拠点ごとに有能な仲介役を発掘することで、得意先の注文に素早く対処するという方針を維持し、その上で着々と行商圏を拡大していったのである。

(Ⅲ) 「専業」書肆へのこだわり

筆者はここまで、書物流通の末端に位置するがゆえに、庶民読者層の要望に肉薄する太田屋六蔵の経営実態を明らかにしてきた。しかも、その一方で太田屋は、広い行商圏を行き来し、新たな顧客の獲得に尽力する地方書肆でもあつた。以上のような事実を前にして思い至るのは、長友千代治氏が描き出した近世貸本屋と太田屋の類似性である。⁽³⁷⁾ 本を売るのか貸し出すのかという違いさえ無視

すれば、両者の特徴はそっくりといっても良い。

ちなみに、『近世貸本屋の研究』という書名のインパクトから、本屋Ⅱエリートと貸本屋Ⅱ叩き上げの二極構造で江戸時代の出版界を捉えたと勘違いされがちな長友氏の議論であるが、実際には両者の融通無碍な関係を指摘することこそ彼の主眼であった。すなわち、零細な本屋は生き残りのために貸本屋を兼業するし、成長著しい新興貸本屋の中には自ら出版業務へと乗り出すものもある。このように決して硬化せず、柔軟な構造を維持し続けた出版界が原動力となり、近世社会にあまねく書物知が浸透したという訳である。

こうした長友氏の主張に従うなら、成長途上の地方書肆太田屋が貸本屋を兼業していても何ら不思議はない。しかし、営業スタイルの類似性に反して、『三谷家文書』からみえてくる太田屋は、貸本屋兼業の地方書肆ではない。⁽³⁸⁾ 購入・不購入の判断を下すため三谷庄右衛門が一ヶ月を越えて見本品を預かつて、わざわざ全冊取り寄せた商品を買わずに返却しても、太田屋は「見料」を一切求めていないからである。

太田屋が貸本業を兼務しない理由として、当然指摘し

なければならぬのは、彼が倉敷から福山へ出張で出ていっているという事情であろう。貸本屋をするからには、最低でも一〜二ヶ月に一回の顧客巡回が必要である。しかし、太田屋はせいぜい年に二〜三回しか福山を訪れない訳で、技術的な見地から貸本業は困難なのである。なるほど一義的な理由は右の通りだが、筆者は同時に、貸本兼業の拒否、そして書物販売への特化が、太田屋の選択した積極的な経営戦略である側面も指摘しておきたい。

次に挙げる史料は、「三谷家・太田屋往復書簡」の一つであるが(※書物取り引きの年代は不詳)、書物販売にかける太田屋のこだわりが垣間見られて興味深い。⁽³⁹⁾

芥子園之内一冊計かし呉候様被仰下候処、夫二者
あと外へ売候事難出来候故、此段無抛御断申上候、
右二付四巻わけ差上申候間、此下直二仕置申候、御
買取可被下候

金式朱 芥子園之内四巻

この史料に登場する「芥子園」は『芥子園画伝』を指しており、江戸時代における代表的な東洋画の入門書である。これ以外にも三谷庄右衛門は、嘉永四年(一八五二)に葛飾北斎の画手本を購入しており、絵画が多彩な趣味

の一つであつたらしい。今回も趣味の充足を目指し、太田屋に『芥子園画伝』の調達を依頼したのである。ただし、最初から同書を購入する予定はなく、「一冊計かし呉候様」と商品の拝借を求めた。三谷はいつものように見本品を一冊届けてもらう程度の気持ちだつたのだろうが、太田屋にしてみれば、最初から購入見込みのない書物を貸し出す意志はなかつた。四冊ほどを安値で分売してやるから、もし必要なら「御買取可被下候」と、拝借要請を拒否したのである。

もちろん右の事例のみから、貸本業兼務に拒否的な太田屋の経営方針を読み取るのは大袈裟であろう。画手本は汚れば価値が下がるデリケートな商品とも考えられるので、今回はたまたま貸し出しを断つたのかもしれない。ただ、購入が期待できない書物取り引きは始めから敬遠し、あくまで買い取りの利潤を中心に経営を組み立てる太田屋の姿勢は垣間見られた。

それでは書物販売に特化することが、なぜ太田屋の生き残り戦略に繋がるのか。福山城下に幕末まで太田屋レベルの地方書肆が存在せず、彼の出張販売がいわば独占的な営業活動であつたことは既に指摘した。しかし、そ

れは対象をいわゆる書肆に限定した場合であり、貸本屋まで加味して考えると、事情は全く変わってくる。表二（次頁）は「三谷家日記」に登場する貸本屋の活動状況を抜き出してみたのだが、神辺の林屋と今津の西村屋が頻繁に三谷家へ立ち寄っていたことは明らかである。

神辺宿・今津宿とは、前述の通り山手村の東西に位置する山陽道の主要宿駅であるが、ここには宿駅の常として旅行者の無聊を慰める貸本屋が存在した。林屋と西村屋がそれである。地理的な条件からすれば、倉敷書肆太田屋よりよほど山手村への訪問が容易な両貸本屋は、間を空けることなく三谷家に出向き、大量の書物を貸し出している。訪問の頻度で勝負すれば、太田屋は林屋・西村屋に対抗すべくもなかつた。

もつとも、両貸本屋が三谷庄右衛門に貸し出した書物のジャンルに注目すれば、太田屋との「棲み分け」が比較的容易であつたことに気付く。例えば『十二朝軍談』『太平記』『太閤真蹟記』というように、貸本屋を利用して三谷が読んだ書物は、その大半が娯楽本としての軍書なのである。太田屋にしてみれば、同じような娯楽本を倉敷から持ち込んでも、営業成果が上がらないことは目に見

表2 『三谷家日記』に登場する福山藩領の貸本屋

年月日	事項
弘化3年(1846)7月2日	神辺林屋から『呉越軍談』18冊を借りる
同年8月9日	神辺林屋から『武王軍談』20冊を借りる
同年9月11日	神辺林屋から『十二朝軍談』14冊を借りる
同年12月3日	神辺林屋から『武家評林』50冊を借りる
同日	神辺林屋へ『呉越軍談』の見料9匁を支払う
弘化4年(1847)10月3日	今津西村屋から『陰徳太平記』40冊を借りる
嘉永元年(1848)4月3日	今津西村屋から『雲の晴間』15冊・『秘事百撰』を借りる
同日	今津西村屋へ『陰徳太平記』を返す
同年4月28日	神辺林屋から『後太平記』12冊を借りる
同年5月9日	今津西村屋から『備後太平記』21冊を借りる
同年10月31日	今津西村屋から『陰徳太平記』21冊・『美作堂上夕話』3冊を借りる
嘉永2年(1849)3月4日	今津西村屋から『草木育種』4冊を借りる
同年閏4月18日	今津西村屋から『景清外伝』15冊を借りる
同年5月7日	神辺林屋から『太平記』を借りる
同年5月21日	今津西村屋へ『景清外伝』を返す
同年7月26日	神辺林屋へ『太平記』を返す
同年8月4日	神辺林屋から『前太平記』11冊を借りる
同年10月5日	神辺林屋から『三韓退治』15冊を借りる
同年11月27日	神辺林屋へ『三韓退治』を返す
同日	神辺林屋から『義経記』10冊を借りる
嘉永3年(1850)1月23日	今津西村屋から『感状記』10冊を借りる
同年2月13日	神辺林屋から『太閤真蹟記』初篇29冊を借りる
同年3月21日	神辺林屋から『夢想屋』9冊を借りる
同年4月8日	今津西村屋から『自来也』を借りる
同年4月16日	神辺林屋から『太閤真蹟記』2篇30冊を借りる
同年7月24日	今津西村屋から『義経記』を借りる
同日	神辺林屋から『太閤真蹟記』14冊を借りる
同年8月2日	神辺林屋から『太閤真蹟記』15冊を借りる
同年8月26日	神辺林屋から『太閤真蹟記』4篇30冊を借りる
同年10月6日	今津西村屋から『正雪記』20冊を借りる
同年10月29日	神辺林屋へ『太閤真蹟記』4篇を返す
同年11月13日	今津西村屋から『膝栗毛』17冊を借りる(見料3匁7分)
同年11月14日	神辺林屋から『太閤真蹟記』5篇30冊を借りる
嘉永4年(1851)2月25日	神辺林屋から『太閤真蹟記』6篇30冊を借りる
同年5月26日	今津西村屋から『北条五代記』5冊を借りる
同年9月2日	神辺林屋から『太閤真蹟記』9篇・10篇を借りる
同年10月23日	神辺林屋から『太閤真蹟記』11篇・12篇を借りる
嘉永5年(1852)閏2月17日	今津西村屋から『膝栗毛』9冊を借りる(見料1匁8分)
安政元年(1854)2月28日	神辺林屋から『東西遊記』20冊を借りる

では取り扱われず、しかも借りて読むだけでは済まない
 には『和漢三才図会』や『日本王代一覽』など、貸本屋
 えている。そこで、例えば『藩翰譜』や『鳩翁道話』、更

は、上方の有力書肆と強いコネクションを持つ太田屋、
 専門書の購入を、在村知識人に勧めることで、独自のス
 タンスを打ち出したのではないだろうか。もちろんそれ

からこそ取れた行動である。

以上ここでは、書物を販売するの
 貸し出すのかという営業スタイルに注
 目し、「專業」書肆に対する太田屋のこ
 だわりを浮かび上がらせてみた。筆者
 はそれを単なる技術上の必然ではなく、
 太田屋の積極的な経営戦略であつたと
 評価しておきたい。

(iv) 地方「売弘書肆」のあり方

貸本屋では扱えないような専門書販
 売への特化が、太田屋の選択した生き
 残り戦略であるならば、彼が大坂書肆
 の出版物に売弘書肆の代理販売店として
 関与していく経緯にも注目する必要が
 あるだろう。なぜなら、こうしたコネ

クシヨシ形成が、太田屋の安定的な専門書供給に繋がったと考えられるからである。

天保期(一八三〇〜四四)に入ると、三都書肆出版の往來物刊記に、全国各地の地方書肆が売弘書肆として名を列ね始めることは既に触れた。鈴木俊幸氏の指摘に基づき、論点をまとめ直しておく以下の通りである。⁽⁴⁰⁾近世後期に地方都市の書物需要はピークを迎え、これを無視した書物販売はもはや不可能になる。そこで三都の大手板元たちは、地方ごとに流通の拠点となり得る書肆を探し出し、彼らを買弘所として取り込んでいった。例えば『浪華百人一首忘貝』は、大坂書肆の秋田屋太右衛門が出版した往來物だが、その刊記には倉敷の太田屋六蔵を始め、和歌山の総田屋平右衛門、姫路の隅屋紀右衛門、岡山の中嶋屋益吉、高知の瀬戸屋才助、博多の多飛屋治助など、全国各地の書肆が名を列ねている。庶民読者層をがっちり掌握している彼らを買弘書肆とすることで、三都の出版物はまんべんなく列島全土に行き渡ったという訳である。

太田屋が関与した他の出版物を探ってみても、右のような三都書肆の経営方針は確認できる。例えば『増女教

百人一首合鐘』や『桂百人一首玉免』の刊記にも、太田屋六蔵の名前が記されるのだが、これらの書物はいずれも、天保・嘉永期に秋田屋太右衛門が出版(もしくは再刻)したものである。地方での売り上げ向上を目指し、売弘書肆掘り起こしに努めた秋田屋であるから、当然両書の刊記に載るのは太田屋だけではない。総田屋・隅屋・中嶋屋・瀬戸屋・多飛屋など前述の地方書肆たちも、太田屋とともに売弘書肆としてその名を書き列ねている。⁽⁴¹⁾

もつとも筆者は、地方都市へと商品の浸透をねらう三都書肆の一方的な思惑のみで、売弘書肆との提携が展開したとは考えていない。当然太田屋ら地方書肆の側から積極的に働きかけ、特定商品の売弘所になろうとする動きはあっただろう。『常山紀談』・『神職考』・『筆のすさび』の三書は、やはりその刊記に太田屋六蔵の名を載せる出版物だが、ここから売弘書肆となることへの地方書肆サイドの思惑を読み取ってみよう。

ひとまず三書の概要を把握しておく、以下の通り。『常山紀談』は、備前岡山藩士で徂徠学者の湯浅常山(一七〇八〜八一)が著した戦国武将の言行録である。『神職考』は、備中笠岡稻荷神社の神官で国学者としても名高い小

寺清之(一七七〇)一八四三)が、神職の起源について論じたものである。『筆のすさび』は、備後神辺の儒学者菅茶山(一七四八)一八二七)が、知人から諸国の異聞・奇事を聞き集め、書き綴った随筆である。いずれも吉備地域(太田屋行商圏)の著名人が記したという点で共通する。もちろんこれらの出版には三都の大手書肆が関与しており、全国的な販路も確保されている。しかし、ご当地びいきの要素なども加味すれば、より良く売れたのは吉備地域であつただろう(※なお、菅茶山は地元神辺に廉塾という漢学塾を開いて生涯門人の育成に努めた人物だし、小寺清之も福山藩に召し抱えられ城下で盛んに国学を講じている⁽⁴²⁾)。以上のような売り上げ予想も考慮に入れ、太田屋は自ら進んで売弘書肆の役目を買って出たのではないだろうか。

この推測を裏付けるべく、『筆のすさび』の刊記は以下のような体裁を取っている。⁽⁴³⁾

安政三年丙辰三月御免

同四年孟春発兌

江戸日本橋通荅町目

須原屋茂兵衛

同式町目

山城屋佐兵衛

三都 京東洞院二条上ル

田中屋治助

書肆 大坂心齋橋北久太郎町北工入

河内屋喜兵衛

同安土町南入

河内屋和助

備中倉敷書林

太田屋六蔵

『筆のすさび』の刊記では、往來物のように全国各地の地方書肆がその名を書き列ねることはない。須原屋茂兵衛・河内屋喜兵衛ら名の知れた三都書肆とともに、地方書肆としては太田屋六蔵の名前のみが登場する訳だから、同書の出版に際して彼が主体的に働きかけた状況を読み取り得るだろう。

ちなみに、書誌学研究の成果によれば、刊記に記される複数の書肆のうち、主要板元は多く末尾に付されるようなので、⁽⁴⁴⁾太田屋を売弘書肆どころか主要板元と想定することも不可能ではない。彼は埋もれた地方の才能を発

見し、三都書肆とともに売り出す「地域文化のプロデューサー」だったのだろうか。残念ながらこうした捉え方はやや過剰評価である。菅茶山の甥にあたる木村雅寿（菅万年）の序文によると、『筆のすさび』は以下のような経緯をたどって出版されている。⁽⁴⁵⁾

茶山翁の随筆の筆のすさびといへるか、四巻はかりありけるを、まつ一卷をやつがれに校しうつさしめ給ひて（中略）其年の夏の頃より翁病ひにわづらひ給けるをとひまゐらせければ、余の三の巻をやつがれにたまひて、わかなくなりての後にいかにもなしてよとのたまはせけるに、つひに其秋身まかり給ひける。かくては翁の記念なりとおもひてかしこくひめおきたるを、いまの世の人翁の出給へるものとだにいへば、たふとかりて見まくほりするに、浪速の書肆なにかしが桜木に鑄て世に伝へまくせちにこふまゝに、またつきくの巻を校して其故よしを、巻の端にかきつけてさつけぬる

この序文によれば、菅茶山は文政十年（一八一七）に没する直前、『筆のすさび』の草稿を弟子の木村雅寿に託したようである。木村雅寿はそれを形見のように感じて秘

蔵していた訳だが、菅茶山作の文章であれば何でも拝見したいという「浪速の書肆」が噂を聞きつけ、是非にと出版を懇願した。当時菅茶山といえは『黄葉夕陽村舎詩』によつて詩才を上方にとどろかせていたから、遺筆の存在をかぎつけやつて来た「浪速の書肆」とは同書出版に深く関与した河内屋喜兵衛や河内屋和助のことであろう。⁽⁴⁶⁾

地方文人の遺筆にまでアンテナを張り巡らせる彼らの営業努力により、『筆のすさび』は出版されるに至った。その間、太田屋に目立つた動きは確認できない。彼はあくまで大坂書肆が見出した出版物を、行商圏の売れ筋商品と判断して、売弘書肆に加わつただけなのである。

もちろん信州松本の高美屋甚左衛門のように、地元印刷技術を頼み、自前の出版物販売に乗り出す地方書肆もいたほどだから、⁽⁴⁷⁾江戸時代の地方文化がいつでも都市に従属していた訳ではない。ここで筆者が明らかにしたのは、それぞれの置かれた条件により、江戸時代の地方書肆たちがいかなる経営戦略を打ち出したかという事実関係である。太田屋の場合、その営業活動は既述の通り、作者の才能を見出すことより、広く読者全般の要望を実現することに力点が置かれていた。地方読者層の好

みに精通していた太田屋は、自ら出版活動に乗り出すまでもなく、上方書肆の出版物から幾らでも売れ筋商品を発掘することができた。こうした側面を評価するなら、自前の出版物を生み出さなかつた太田屋もまた、三都に従属する地方書肆ではなく、主体的に地方文化の形成を担った文化プロデューサーであつたと表現して良いだろう。

三、三谷庄右衛門の読書

さて、前節ではもっぱら太田屋六蔵という書肆に着目し、江戸時代の地域社会における書物知のあり方を考察してみた。そこで今度は、三谷庄右衛門という読者に焦点を移し、より直截的な視角で村落民衆の読書方法を探ってみた。表一から三谷が購入した書物をみる限り、彼は囲碁、詩文、絵画と多彩な趣味を持ち、儒書・農書・石門心学書も読みこなす知識人であつた。もつとも、彼の学問は自ら著述を残すレベルには到達していないから、『三谷家文書』を探ってみても触れた書物一つ一つへの深遠な読解の痕跡を見付け出すことはできない。この

点は分析を進める上でマイナスの条件であるが、その一方で著述を残すレベルにない三谷のような村落民衆こそ、江戸時代に登場した新しい読者層ともいえる。そこで、近世後期のどこにでも存在した一上層農民の読書形態を解明すべく、乏しい史料の中からはあるが、以下の考察に進んでいきたい。

(i) 読者としての成熟

三谷庄右衛門が、書物へのこだわりから様々な注目を付け地方書肆太田屋六蔵を振り回していた事実については、既に繰り返し触れてきた。しかし、逆説的に表現すれば、それこそ近世後期における村落民衆の洗練された読書を示すものともいえる。

例えば、三谷は『日本王代一覽』の「板うつり」の悪さにクレームを付け、また節用集の項目立てに不満を感じて、その都度太田屋から代替品を取り寄せている。店頭購入がある程度容易な現代社会なら、あらかじめ商品と比較した上で、より良いものを選択するのは当然である。しかし、江戸期の村落民衆が、日常的に書肆店頭へ

通い、比較の上で商品を購入するのは不可能であった。彼らの場合、たとえ地方書肆を繰り返し往復させることになっても、納得いくまで商品を吟味し、その上で購入に至るのが賢い消費者のあり方だったのである。もちろんそこには、太田屋が逐一適切な対応をみせてくれるという保障が必要な訳であり、三谷は地方書肆の経営方針に支えられつつ、着実に読者としての成熟を遂げていったといえる。

ちなみに、三谷がみせる書物への細やかなこだわりは、何の根拠もない思い付きでなく、事前に入手した書誌情報に基づくものであった。例えば、安政四年（一八五七）のものと考えられる「三谷家・太田屋往復書簡」の一つでは、以下のような書物取り引きが展開されている。⁽⁴⁸⁾

覚

一、金貳分 吉田評帖二

一、同一両 外史大本廿二

ノ

右之通此度差上申候、御入掌可被下候、外史川越本
昨亥年京撰仲間内為頼置候得共、近頃江戸表々とんと
と参り不申、無抛大本之分差上申候、左様思召可被

下候、以上

二月廿一日

太田屋六藏

開地様

この史料によると、三谷は太田屋に「外史川越本」の取り寄せを依頼したらしい。しかし、「川越本」は近年入手困難ということで、太田屋は「大本之分」を配送し、購入を求めている。

ここに登場する『日本外史』が頼山陽（一七八〇〜一八三二）によつて著された漢文体の史書であり、その情熱的な文章ゆえに幕末志士の愛読書となつたことは周知の通りである。もつとも、頼山陽生前に『日本外史』がベストセラールとなつた事実はなく、同書が本当の意味で世に出たのは弘化元年（一八四〇）の『校刻日本外史』出版によつてであった。当時武蔵国川越藩には好学の藩主として名高い松平斉典がいたが、彼は藩儒保岡嶺南に命じて『日本外史』を丹念に校訂させ、藩校蔵版のかたちで出版させた。これが『校刻日本外史』十二冊である。川越版の名で親しまれた同書は、時代風潮にも後押しされて爆発的にヒットし、日本外史はようやく人々の知るところとなった。⁽⁴⁹⁾

以上のような経緯を踏まえて安政四年の書物取り引きに戻ると、三谷は川越版が記念碑的な出版物であることに良く理解した上で、わざわざそれを指定注文したことになる。結果的にいえば、川越版はこの時期「江戸表々とんと参り不申」という状況にあり、太田屋はやむを得ず大本二二冊を勧めるしかなかった。この大本の『日本外史』は、川越版に対抗して、嘉永元年（一八四八）に出版された頼氏蔵版のものと考えられるが、ここで述べたのはそうした細かい事情ではない。要するに三谷は、太田屋が持ち込んでくるお勧めの商品から買いたい書物を選ぶだけでなく、事前に得た書誌情報に基づき特定商品の指定注文も行っていたのである。

それではそもそも彼は、いかなる方法で書誌情報を入力していたのか。都市部から離れるほど書物知から阻害されるというイメージの一方で、意外にも三谷は購入に先立って様々な事前調査ができたようである。例えば嘉永二年（一八四九）に『囲碁定石集』という書物を取り寄せた際、三谷は「此置碁自在本之義、書林之目錄二有之候、玄々齋主人著と有之候分」と太田屋に指示を与えている。⁽⁵⁰⁾ 江戸時代前中期には、多様なジャンル・板元を網

羅する書籍目録しよしょくもくが続々と出版され、書物購読者に有用な情報を提供したが、⁽⁵¹⁾ 三谷のいう「書林之目錄」とは、恐らくそのような書籍目録を指すのではあるまい。むしろ、近世後期から盛んに奥付部分に刷り込まれ始め、上述の網羅的な書籍目録に取って代わった板元個々の蔵版目録を指すものと思われる。⁽⁵²⁾ 三谷を含む近世後期の読者たちは、新しく書物を読むたびに、こうした蔵版目録や出版広告に接し、着実に書誌情報を蓄えていくことができた。

なお、三谷が書誌情報入手のため利用したのは、何も蔵版目録だけではない。表一をみると、彼は『群書一覽』や『軍書要覽』といった書物にも接している（※ただし、『群書一覽』は不購入）。タイトルから明らかなように、両書はそれ自体が書誌情報で構成された書物である。当然三谷はこれらを参照して、新たな書物購入へと思いを巡らせただろう。現代に生きる我々は、整備された検索システムにより日々膨大な書誌情報を手にしている訳だが、江戸時代にもそれに先駆けた参照手段の充実が着々と進展しつつあった。三谷庄右衛門という平凡な一上層農民は、しかし時代の流れに後押しされて巧みに書誌情報を収集し、自らの欲する書物へと近づいていく、「成熟

した読者」になり得たのである。

(ii) 反復的読書の未確立

さて、前述の通り三谷庄右衛門が成熟した読者であることは間違いない。しかし、近代を先駆けた知的読書振りへと結論を急ぐ前に、あくまで彼が近世的な読者であり、その読書スタイルが時に近代人と異なることにも注意を喚起しておきたい。

話が少し横道に逸れるようだが、太田屋は一度売却した商品を買戻す希望により再び買い取るサービスも行っていた。弘化元年(一八四四)のものと考えられる「三谷家・太田屋往復書簡」の一つでは、以下のような書物取り引きが太田屋から提案されている。⁽⁵³⁾

藩翰譜八通例之通り二わり引二而御算用被成候へ者
宜敷奉存候

百廿匁

内、六十四匁 藩史

残五十六匁

右之通相成可申候

(中略)

十月廿日

開地様貴報

太田屋六藏

弘化元年四～五月の書物取り引きにおいて、三谷が『藩翰譜』十五冊を八十匁の値段で購入したことは既に触れた。しかし、彼は早々にこの大部な書物をもてあましたらしく、同年十月再び太田屋が福山に訪れると再売却を申し出た。太田屋にとって顧客のこうした申し出はお馴染みのもので、「通例之通り二わり引二而御算用」、つまり八十匁で売却した『藩翰譜』は六四匁で買い取ると返答した。古本の買い取りは、元値の二割引きが慣例化していたことになる。ちなみに、開地三谷家は近代まで繁栄を維持し続けた家であるから、購入書物の再売却といっても家計を助けるための財産処分ではなく、この六四匁も早速次なる商品を手に入れるための資金に充てられた(※書簡中の「百廿匁」は後述する『三河後風土記』の値段と一致するので、恐らく太田屋は『藩翰譜』の再売却代と「残五十六匁」で同書の購入が可能だと三谷に状況説明しているのだろう)。

近代の読書人でも、購入した書物への関心をたちまち

失うことは珍しくない出来事だから、三谷が『藩翰譜』を短期間で手放したとしても、それだけで驚くには値しない。しかし、右のような再売却が頻繁に繰り返されているとしたら、話はまた別だろう。

表一で確認すると、『藩翰譜』を六四匁で売り払った三谷庄右衛門は、それをそのまま新商品の購入代にして、弘化元年十月に『三河後風土記』四六冊など幾つかの書物入手している。ところが、一二〇匁といふかなりの高額で購入した『三河後風土記』も、結局弘化四年（一八四七）には不要と判断されたらしく、その売却代九六匁を軍資金として次に『和漢三才図会』が購入された。『和漢三才図会』はいわずとした江戸時代を代表する百科事典であるから、全八一冊で二〇〇匁にもなる同書を家蔵せんがため、三谷は泣く泣く『三河後風土記』を手放したのだろうか。残念ながら右のような推測は的外れである。何しろ彼は、嘉永二年（一八四九）に『和漢三才図会』も手放して、再売却で生じた一六〇匁を元手に、『常山紀談』などの書物を買求めたからである。更にくどくどしくこの『常山紀談』の行方も追っておくと、同書が三谷家に長く所蔵されることはなく、嘉永五年（一八五二）

に売り払われ、三国志などを購入するための元手に充てられた。

ところで、十九世紀の日本社会に「復古の歴史的潮流」とても呼ぶべきものが生み出され、幅広い階層の人々が家や地域の歴史顕彰に熱狂していった事実は、羽賀祥二氏も指摘する通りである。⁵⁴ 考証への情熱は、人々を古典籍収集に駆り立てたから、近世後期の民間国学者の中には、数万冊の書物を蓄えたいわゆる蔵書家も誕生し始める。⁵⁵ 以上のような時代の流れに、備後地域が独り取り残されていた訳ではない。福山藩領向永谷村の庄屋を務めた馬屋原重帯（一七六二〜一八三六）は、ライフワークのように地域の歴史を書き綴り、藩領域を網羅する地誌『西備名区』を完成させた。また、儒学者・漢詩人として名高い菅茶山も、藩主の命を受けて地誌『福山志料』の編纂に尽力した。⁵⁶

地誌編纂に情熱を燃やした二人の知識人は、三谷庄右衛門にとつて近隣に住む同時代人である。それでは三谷に、彼らのような文献考証の姿勢が窺えるだろうか。答えは否である。大枚はたいだ百科事典を家内に常備することなく、二年後にあっさり売り払ってしまったのが三谷

なのである。なるほど文献考証への熱狂が、儒学・仏教・神道・国学など学問の分野を越えて、十九世紀の日本社会を広く覆うのは事実であろう。⁽⁵⁷⁾しかし、三谷のような庶民読者層にとつて、読破した書物群を体系化し、必要に応じて再読するなど、思いも寄らない行為であった。彼は考証主義と縁のない読み捨ての読書慣行に生きていたといえる。

こうした読書姿勢から筆者が思い浮かべるのは、紅野謙介氏が指摘した和装本と洋装本の差異である。⁽⁵⁸⁾和装本は、分厚く丈夫な和紙の特性もあり、必然的に一冊三十〜四十丁程度の薄いものとなる。そのため背表紙や目次が付されることもなく、書物を二度三度と読み返す習慣も和装本中心の江戸時代には生み出されにくかった。ところが、数百丁を一冊にまとめ得る洋装本が明治期に普及し始めると、背表紙・目次を頼りに再読・再々読することが可能となり、ここに近代的な読書習慣が成立する。以上のような指摘を踏まえて、再び三谷庄右衛門の読書に話を戻そう。太田屋の古本買い取りサービスに注目してみる限り、三谷の書物購入に計画的な蔵書形成の意識は希薄であり、読み切った書物は次々と再売却されていた。

た。もちろん彼はなかなか洗練された読者であり、意欲的に書誌情報を収集した上で好みの書物を購入している。しかし、熱心な探索が必ずしも知識の蓄積や再利用に繋がる訳ではない。少なくとも三谷の読書に関していえば、それは明治期以降のような反復的読書ではなく、紅野氏が指摘するような近世的読書そのものだったことになる。

おわりに

本稿は、あくまで一地方書肆を素材として行った試論的な実証報告に過ぎない。ただ、一つ積極的な成果を挙げるとすれば、それは地方書肆の成長と庶民読者層の成熟を双方向的に考察できた点であろうか。

太田屋六蔵は、倉敷に本拠を置きつつ、備中・備後を広く行商圏として活躍する地方書肆であった。太田屋が着実に地域社会の書物需要を掌握し、営業利益を上げられたのは、三谷庄右衛門のように取り引きの中核となる庶民読者層が続々と各地で叢生していたからである。更にいえば、太田屋は大坂書肆の出版物に売弘書肆として加わり、そのコネクションを生かしてやや専門的な書

物を販売していたが、こうした経営戦略を取り得るのも、彼が三谷のような知的読者に支えられていたからといえよう。

他方、三谷もまた充実した参照手段から事前に書誌情報を探り出し、強いこだわりを持って書物取り引きに臨んでいた。三谷の注文を引き受けるかたちで、太田屋が繰り返し市場調査をさせられることもあったが、逆にいえば逐一要望に応える地方書肆に支えられ、三谷ら読者層は成熟していったのである。

もともと、地方書肆と庶民読者層の意図が常に良好な関係性を保ち得ていた訳ではない。娯楽本中心の貸本屋と差異化を図るため、三谷が販売に特化し、やや専門的な書物を取り扱っていたことは既に触れた。この方針は一面で良く成功したといえるが、買い手である三谷にとって、今津宿や神辺宿から訪れる貸本屋と倉敷から訪れる書肆太田屋の間に、そこまで明白な境界線が引かれていたとは考えられない。貸本屋から借りた書物だから読み捨て、書肆から購入した書物だから家蔵するという、太田屋が思い描いた道筋で事態は推移していないからである。三谷にとつて貸本屋と地方書肆の差異はあくまで

曖昧なものであり、たとえ太田屋の商品であっても古本二割引き買い取りの慣例を活用（もしくは悪用）して、貸本同様に次々と読み捨てていた。地方書肆と庶民読者層の間にあつたのは必ずしも絶対的な信頼関係ではなく、両者の適度な緊張感の中で、近世的な書物知のあり方が出来上がったといえる。

【註】

- (1) 例えば、横田冬彦「益軒本の読者」（横山俊夫編『貝原益軒』平凡社、一九九五年）や同「近世民衆社会における知的読書の成立」（『江戸の思想』五号、一九九七年）、同「近世村落社会における〈知〉の問題」（『ヒストリア』一五九号、一九九八年）などを念頭においている。
- (2) 若尾政希『太平記読み』の時代（平凡社、一九九九年）。
- (3) 横田冬彦「近世の出版文化と〈日本〉」（酒井直樹編『歴史の描き方Ⅰ』東京大学出版会、二〇〇六年）。
- (4) 今田洋三『江戸の本屋さん』（日本放送出版協会、一九七七年）。
- (5) 長友千代治『近世貸本屋の研究』（東京堂出版、一九八二年）。
- (6) ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』（筑摩書房、一九九

六年)。

- (7) ちなみに、長友千代治氏は貸本屋の研究のみに留まることなく、同『江戸時代の書物と読書』(東京堂出版、二〇〇一年)や同『江戸時代の図書流通』(思文閣出版、二〇〇二年)の中で、読書論・読者論にも言及している。いずれも学ぶところの多いものだが、貸本屋研究との有機的な結び付きは残念ながらあまり見出せず、むしろそれぞれ別個の研究として展開している感が強い。
- (8) 鈴木俊幸『江戸の読書熱』(平凡社、二〇〇七年)。
- (9) 小林准士「近世における知の配分構造」(『日本史研究』四三九号、一九九九年)。
- (10) 『角川日本地名大辞典』(広島県)。(角川書店、一九八七年)「山手村」の項参照。
- (11) 頼祺一「近世の宮座と村落」(福尾教授退官記念事業会編『近世社会経済史論集』、吉川弘文館、一九七二年)。
- (12) 福山城博物館附属鏡櫛文書館所蔵。なお同家の史料については、『広島県大百科事典(下巻)』(中国新聞社、一九八二年)「三谷家文書」の項に詳しい。
- (13) もっとも、「三谷家日記」が現存しているのは、天保十四年(一八四三)から明治四年(一八七一)までであるから、三谷庄右衛門と太田屋六蔵の書物取り引きが、それ以前に遡る可能性は大いにある。

(14) 長友氏註⑤前掲書一三三〜一四四頁。

(15) 『福山市史中巻』(福山市史編纂会、一九六八年)八六七〜八七一頁。

(16) 大和博幸「地方書肆の基礎的考察」(朝倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』、東京堂出版、一九九三年)。

なお、管見の限りであるが、笹屋喜兵衛の関与が明らかでない出版物は福山の地方文人門田朴齋の詩草を収めた『朴齋詩鈔初編』のみであり、これは慶応三年(一八六七)に刊行されている。

(17) 鈴木氏註⑧前掲書四四〜六八頁。

(18) 「三谷家日記(天保十五年)」(『三谷家文書』)。

(19) 「三谷家・太田屋往復書簡(2-51)」(『三谷家文書』)。

なお書簡の通し番号は、調査の便宜上、筆者が仮に付けたものである。

(20) 「三谷家・太田屋往復書簡(2-30)」。

(21) とところで、三谷家が支払ったこれらの書物代と、三都の板元から同商品を直接購入した場合の価格は、いかなる関係にあったのだろうか。岐阜大学の佐藤貴裕氏のご教示によると、「薄用早引」⇨『大全早引節用』に付けられた十八匁五分という値段は、かなり割高な設定のようである。三都で書物を仕入れる際の市場価格と、太田屋が地方読者に売却する際の値段設定とを比較すること

は、地方書肆の経営基盤を解き明かす上で重要な作業といえる。ただし、本稿で登場する書物について、逐一幕末期の市場価格を把握するのは至難であるため、結論はひとまず留保し、今後の課題とさせて頂きたい。

ただし、最終的な書物購入が追跡できる取り引きに絞って作表した。

- (23) 「三谷家・太田屋往復書簡(2—27)」。
(24) 「三谷家・太田屋往復書簡(2—55)」。
(25) 「三谷家・太田屋往復書簡(1—32)」。
(26) 「三谷家・太田屋往復書簡(1—104)」。
(27) 「三谷家・太田屋往復書簡(1—102)」。
(28) 「三谷家・太田屋往復書簡(1—55)」。
(29) 「三谷家・太田屋往復書簡(1—23)」。
(30) 「三谷家・太田屋往復書簡(2—54)」。
(31) 「三谷家・太田屋往復書簡(2—60)」。
(32) 「三谷家・太田屋往復書簡(1—68)」。
(33) 「三谷家・太田屋往復書簡(1—58)」。
(34) 小林氏註(9)前掲論文。
(35) もっとも、筆者はこのような発言によって、近世前中期段階における地方読者の「不在」や「脆弱」を強調したい訳ではない。またたよりないコネクションをたどりながら何とか書物を手にしていく地方読者こそ、元禄文化

を下支えしているという横田冬彦「三都と地方城下町の文化的関係」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇三集、二〇〇三年)の見解には、筆者も大いに共感している。ここで強調しなかったのは、地方読者自らが書物知と結び付く良好な環境を作り出し、更には太田屋のような地方書肆繁栄の土台になっていく近世後期的な状況である。

- (36) 「三谷家日記(弘化二年)」。
(37) 長友氏註(5)前掲書。
(38) 断っておくと、本稿で考察し得たのは、あくまで福山出張販売中の太田屋六蔵に過ぎない。倉敷における太田屋は当然常設店舗を持っており(『新修倉敷市史第四巻』六三七頁、二〇〇三年、山陽新聞社)、果たしてそこで貸本屋が兼業されていたかは、現時点で未検討である。ちなみに、行商スタイルに関しても同様で、倉敷における太田屋が、常設店舗への訪問客から主に注文を受けていたのか、得意先への巡回で経営を成り立たせていたのか、全く明らかにし得ていない。そういう意味で筆者に残された課題はまだまだ多いが、いずれも今後時間をかけて解明していきたい。
(39) 「三谷家・太田屋往復書簡(1—38)」。
(40) 鈴木氏註(8)前掲書四四〜六八頁。

- (41) なお、国文学研究資料館ホームページの日本古典資料調査データベースを参照した。
- (42) 濱本鶴賓『福山藩の文人誌』（児島書店、一九八八年）一三五頁。
- (43) 『日本随筆大成第一期第一巻』（吉川弘文館、一九七五年）一五七頁。
- (44) 中野三敏『書誌学談義江戸の板本』（岩波書店、一九九五年）一七八〜一八六頁ならびに廣庭基介・長友千代治著『日本書誌学を学ぶ人のために』（世界思想社、一九九八年）一八三〜一八八頁。もつとも、複数の書肆が刊記に載る場合、主要板元を見極める絶対的な法則はないため、諸々の条件を加味して熟考すべき点も併せて指摘されている。
- (45) 註(43)前掲書七六頁。
- (46) なお、『享保以後大阪出版書籍目録』（清文堂出版、一九六四年）二八二頁でも、菅茶山翁筆のすさひ四冊の板元として河内屋和助の名前が挙がっている。
- (47) 鈴木氏註(8)前掲書一一二〜一二五頁。
- (48) 『三谷家・太田屋往復書簡(1―1)』。
- (49) 頼成一・頼惟勤訳『日本外史(下)』（岩波書店、一九八一年）四七三〜四九八頁。
- (50) 『三谷家・太田屋往復書簡(1―83)』。
- (51) 慶應義塾大学斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成(一〜三)』（井上書房、一九六二〜一九六四年）。
- (52) 事実、須原屋伊八の蔵版目録中には、『囲碁定石集』が「玄々斎主人著」として紹介されている（小泉吉永編『近世蔵版目録集成往來物編第老輯』三二五頁、岩田書院、二〇〇五年）。
- (53) 『三谷家・太田屋往復書簡(2―33)』。
- (54) 羽賀祥二『史蹟論』（名古屋大学出版会、一九九八年）。
- (55) 岡村敬二『江戸の蔵書家たち』（講談社、一九九六年）。
- (56) 註(15)前掲書八六〇〜八六七頁。
- (57) 表智之（「歴史」の読出し／「歴史」の受肉化）（『江戸の思想』七号、一九九七年）。
- (58) 紅野謙介『書物の近代』（筑摩書房、一九九二年）。
- (59) 『三谷家・太田屋往復書簡(1―2)』で安政四年（一八五七）の書物取り引きを探ると、この年ついに太田屋は「追而二わり引御返しハ御断申上候」と、三谷の古本再売却を牽制する動きをみせている。